

佐々木邦全集

佐々木邦全集

補卷五



佐々木邦全集 補卷5 王将連盟 短篇

昭和五十年十二月二十日 第一刷

著者 佐々木邦

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―十二―二十一 郵便番号 一一二

電話東京(〇三)九四五―一一二(大代表) 振替東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

©佐々木孝雄 一九七五年

目次

王将連盟

7

短篇

好人物

85

閣下

135

女婿

142

朝起の人達

162

一年の計	169
或る良人の惨敗	176
恩師	183
社長秘書	191
髪の毛	198
母校復興	205
首席と末席	212
小問題大問題	219

変人伝 230

善根鈍根 240

首切り問答 255

村一番早慶戦 264

或る温泉の由来 280

心のアンテナ 294

冠婚葬祭博士 308

秀才養子鑑 323

妻の秘密宮 340

人生正会員 352

合縁奇縁 364

ロマンスと縁談 376

四十不惑 390

田園情調あり 403

解説・岡保生 414

著作年表 421

王
將
連
盟

入閣受諾の日

「宇井さん、あなたのところには玄関子が何人いるんですか？」

と某伯爵が不審そうに訊いた。

「七人いますよ」

と宇井さんが答えた。宇井さんは大臣を二度勤めて、現在は樞密顧問官である。

「成程。それではいつお訪ねしても違った顔の青年が出て来る筈です。あの人達は皆学校へ通っているのですか？」

「はあ、昼間大学へ行く組と夜学組があります」

「あなたのことでですから、天下の秀才を集めて、特別の訓練をしていられるのでしょうか？」

「これということもありません。集める気もないんですが、それからそれと頼まれるものですから、つい家が寄宿舎のようになってしまっています」

「私もこれから方針を変えて、人材を養うことにしましょう。つまらないものを飼っていると、物議を醸します」

「ハッハ、ハ、この間新聞で拝見しましたが、飛んだことでしたな」

「世間を騒がせて済みません。その筋から注意を受けて恐

縮しました。ハッハ、ハ、」

「あれは食いつきましような？」

「あの口ですもの。食いつきましますとも、ガブリとやったら、もう金輪際放しません」

伯爵は鰐を飼っている。単なる物好きからでない。鰐からは墓口が取れる。墓口には必ず金が入っていると考えたのでもあるまいが、先頃南洋へ視察に行った時、鰐の子を沢山持つて帰って、殖産興業の為に飼育している。それがこの間の晩逃げ出して、近所界限を這って歩いたから、多大のセンセーションを惹き起した。中どころのが数足だったけれど、新聞は、丈余のが無慮数十尾と伝えたのである。伯爵も騒がせるけれど、新聞も驚かせる。

さて、鰐の話ではない。宇井閣下の家のことだ。閣下のところは書生さんの多いお屋敷として知られている。偶然、筋向いにもう一軒宇井姓を名乗る屋敷がある。そこは銀行の頭取で財界の重鎮だから、閣下の家よりも構えが更に大きい。樞密顧問の宇井さんに対して、〇〇銀行の宇井さんと呼ばれている。出入の商人の間にももう一つ手取り早い区別がある。書生の宇井さんに犬の宇井さんだ。書生の大勢いる宇井さんに対して、犬の沢山いる宇井さんだ。銀行の宇井さんのところには洋犬が十五、六匹飼ってあって、その係の男が三人いる。無闇に物を飼う人間が出て来るが、爬虫類や、獣の話でない。

秋晴れの或る朝、犬の宇井さんの家の犬係の一人が、毛むくじやらの小犬を二匹引いて散歩に出掛けた。駄犬と違って、純血種の逸物は世話が焼ける。毎日規則正しく運動をさせなければならない。犬と人が書生の宇井さんの門前

を過ぎると間もなく、向うから若い相撲が通りかゝつた。取的だ。引詰め髪に結つて、見すばらしい服装をしているが、図体は素晴らしい。

「巨いな」

と大係の男は擦れ違いながら、背較べをして、覚えず歎声を発した。

「コッソ」

これは相撲が拳を出して、男の頭を上から小突いた音だつた。男はよろけた。

「何をする？」

「巨いとは何だい？」

「巨いから巨いと言つて、褒めてやつたんだ」

「余計なお世話だ。引つ込んでいろ」

「この馬鹿野郎！ 矢張り総身に智恵が廻らないんだな」

大係は最初敬意を表して巨いと言つたのだが、こうなれば、もう行きがかりだ。

「何を？ こん畜生！」

「人を小突くつて法があるか？」

「小突きたいから小突いたんだ」

「野郎！ 人を見違えたか？」

「何処の馬の骨だい？ 犬に養つて貰つていやがつて」

相撲は拳を固めて、丹念に息を吐きかけた。大係は慌てて、二三歩遠退いた。何分、巨いから恐ろしい。折から二匹の小犬は何か目的物を見つけたように、先へ急いでグングン引つ張つた。土佐犬やシェパードでなくてお相撲さん、大仕合せだった。男もこれで引つ込みがつく。犬が引つ張るから心は弛緩に逸れども、今は是非もないという形を誇

張して行つてしまった。相撲も敢えて喧嘩を売るのでない。もう見向きもしないで、道を斜めに、書生の宇井さんの門へ入つて行つた。勝手を知っているから、案内を請わない。内玄関へ消えたと思うと、もう書生部屋の並んでいるところへ通つた。犬の宇井さんが犬の爲めに設備をしているように、書生の宇井さんは書生の爲めに建築している。玄関子が各自一室を持つてゐるところは外にはあるまい。

「や。これは／＼、金子さん」

出合い頭の青年が丁寧にお辞儀をした。それは夜学組の一人だった。

「この間は失敬」

「どう致しまして、今日はようこそ」

「皆いますか？」

「いらっしゃいます。集會室の方にお揃いです」

「大将、又お説法でもしているんですか？」

「いや、閣下はお客様とお話中です」

「道理で自動車が四五台外に待っていました。それから玄関のところ人に大勢詰めかけているようでしたよ」

「新聞社の人達です」

「有難い。そんなに千客万来なら、『兜山、一寸来い』はやりません。この頃は大将が苦手になりました。『どうだい？ 相変らずか？』とお出になります。『へい、相変らず出世をしません』と答えるのだから、兜山、幾ら神経過鈍でも辛いです」

金子君は幕下十兩のその下の又その下ぐらいだらう。附の下の方に同という字を数名で担いでいる一人で、所謂禪担ぎだ。名前を兜山という。郷里の村の山に因んで、

宇井閣下がつけてくれたのである。金子君は小学校時代に怪童という評判を博して、相撲は無敵だった。尋常六年の秋、同郷の大先輩宇井閣下と蕨見村長の肝煎で、大関千曲川の弟子になった。直ぐに相撲の稽古をして貰えると思つたら、又小学校へ入れられた。元来成績が良くないところへ、田舎から東京へ更つて勝手が分らなかつたから、当然のように落第して、卒業が一年後れた。図体は大きいけれど、頭が少し疎い。しかし師匠夫婦は子供がないものだから、特に目をかけて、相撲の稽古をさせる一方に商業学校へ通わせてくれた。相撲が簿記や算盤を習うのも妙なもののだが、人間、頭の訓練がないと大成しない。金子君は殊にその必要があつたのだらう。

「これからの相撲はスポーツマンだよ。お互に学を修めて、地位の向上を計らなければいかん。横文字の百や二百は覚えて、足の指をつかわずに十一から上の勘定が出来ないと困る。人間は二十五まで身体が発育するからだから、稽古は急ぐに及ばない。安心して商業学校を卒業してしまえ」

と角界のインテリをもつて鳴る師匠が言つたのである。学問嫌いの金子君は迷惑だった。英語も商業算術も分らない。修身の外は大抵苦手だ。学校へ行つて、居眠りをしてるばかりだった。その代り運動場では目を覚まして暴れ廻る。それだから五年通つたけれども、三年生から上へは進級は算東なかつた。尚おこれから先、何年やつても全く同じことだと鑑定がついて、一種の論旨退学になった。こういうのがあると、他の生徒まで怠けて困る。訓化の上から面白くない。保証人の千曲川閣へ、是非引き取つてくれと

いう学校からの相談だった。金子君はそうとも知らず、宇井さんを訪れて、

「閣下、校長さんのお考えによると、私は学問に癡り過ぎて、本業の相撲を忘れる心配がありますから、思い切つて、学校をやめることにしました。お蔭様で頗る具合が宜しいです。今までは毎日頭に鍋を被っているような心持でしたが、それが悉皆直つて、清々となりました」と報告した。閣下は恩人だ。私も一度は天下の横綱になつて御覧に入れますと約束がしてある。

「それも宜かろう、グズ／＼していると後れてしまう。幾つになつたね？」

「此年徴兵です。本当なら、もうソロ／＼幕へ入っている時分ですけれど、学者になつてしまつて、大損をしました」「卒業しないのなら、五年は長過ぎた。まあ／＼、それでも多少何かの役に立つたらうから、全然損つてこともなからう」

「役に立つの段じゃありません。お前は学者だからって、立派な関取衆が頭を下げて頼むんです。私は皆さんの手紙を読んだり書いたりしてやります」

「豪いものだな。アッハ、ハ、ハ」

「芸者のファンにやるのなんかはナカ／＼苦心をします」

「馬鹿だな。そんなものは断るが宜い」

「私も学者の見識にかゝりますから、厭ですけれど、御機嫌を取つて置かないと、稽古をして貰えません。断ると観面です。『為公、お前が忙しければ、おれも忙しい。何処かに閑なデクノボウがいるだらうから、そこへ行つて打つつかれ』と言つて、相手にしてくれませんか」

「成程ね。むずかしいものだ。それじゃ即かず離れずに、要領よくやるさ」

「その辺は心得ています。この間は学問を使って、閑取を一人、師匠の見ている前で、ひねってやりました」

「勝ったのかい？」

「へい。稽古中に、『閑取、師匠の見ている前で転んでおくれ。その代りラヴ・レターの上等を書いて上げる』と言ったんです」

「馬鹿な」

「奴さん、女優から手紙が来ているんですけれど、ひどい悪筆の上に本字を二十しか知らないという怪物ですから、返事が書けないんです。『仕方がない』と言って、美事にひねらせましたよ。しかし駄目です。師匠は知っていました」

「ふうむ」

「今のは何だ？　って」

「ハッハ、ハ、ハ」

「矢張り八百長はいけません」

「いけないとも。しかし変りものが多いだろうから、交際がむずかしがるうな？」

「へい。まかり間違うと、搏しつけられます。皆荒いですから、何うしても御機嫌を取らねばなりません」

「仕方がない。御機嫌を取って稽古をよくして貰うさ。早く十両まで漕ぎつけないと話にならない」

「へい。学校をやめたから、もう山が見えています。こゝの連中が大学へ入らない中に此方は暮へ入って、支那料理を御馳走してやります」

「そう行ってくれれば宜いが、大分手間がかかるから痺れが切れる」

「へい」

「少くとも入幕だけはして貰わないと、儂と蕪見君は責任者だから困る」

「へい」

「家でも心配しているだろう。始終音信をしているのか？」

「へい」

「お父さんお母さんは達者か？」

「へい」

「もう宜しい」

と言って、宇井閣下は退出を命じた。金子君はお説法が始まると、逃げる法を知っている。それは何を訊かれても、「へい」と答えて、亀の子のように這いつくばることだ。これを二三度やられると、閣下は拍子抜けがして、もう宜しいと言ってしまう。

集會室は宇井閣下が書生達を集めて、お説法をするところだ。秋の日曜の朝、御無沙汰見舞に訪れた金子君は、閣下よりも仲間会いたかったのである。閣下が来客と対談中だと聞いて、安心して集會室へ急いだ。そこには懐しい郷党の儂輩が首を鳩めて話し込んでいた。

「やって来たね。流石に気になると見えて」

立川君が立って、手を伸ばして迎えた。

「野郎共、揃っているな」

「気が気じゃないんだ」

「何うしたんだい？」

「天下の形勢さ」

「はてな。そう言えば、今号外屋がチリン／＼やっていたが、何かあるのか？」

「呑気だ、相撲取ってものは」

「為ちゃん、内閣が更るんだよ」

と三好君が教えた。立川君は隅から腰掛を引いて来て薦めた。巨いから椅子だと折ってしまう。

「何のことやれ。おれ達には縁もゆかりもないことじゃないか？」

「いや、あるんだ。家の大将が内務大臣になる」

三好君がなお説明を続けた。

「本当かい？」

「首を一つ縦に振りさえすれば、内務大臣だけれど、ナカナカ振らないから困る」

「今見えているお客さんは河内山伯爵と組閣本部の人だ。」

大将を説いている」

これは小西君だった。この三人が大学組だ。金子君とは竹馬の友である。

「河内山伯爵なら、おれは知っているぞ。おれは御前から葉巻を一本貰ったことがある」

「ふうむ。どうして？」

「師匠のパトロンだから、場所でお目にかゝるのさ」

「成程。今度は伯爵も大臣になるのらしい」

「それは丁度好いところへ来たな。お昼にはお祝いの御馳走があるだろう？」

「まだ分らないんだ。大将、今度は最後の御奉公になると思うのか、ナカ／＼慎重だ。直ぐに打つ潰れるような内閣

なら、入っても詰まらないからね」

「注文があるんだな。おれ達だって、注文をつけて仕切りに手間を取るんだから、無理もない。立ってしまえば、もうそれっきりだ。誰だい？ 総理大臣は」

「大東伯さ」

「成程。あの人も相撲が好きだ。これは相撲内閣だぜ」

戸が開いて、青年が顔を出した。先刻金子君に話しかけたのは別人だ。日曜は夜学組が当番になって働く。夜学組も郷党の子弟だ。けれど皆若い。中学校へ通っている。

「閣下はお出掛けでございます」

報告に來たのだった。

「どんな具合だい？」

と小西君が訊いた。

「一向分りません」

「お客さん達と御一緒か？」

「そうです」

「有望々々。組閣本部へお出になるんだ。恐らく追って受諾されるだろう」

皆玄関へ行つて整列した。閣下の出入りを送り迎える習慣になつてゐる。宇井さんは矢張り官僚畑で育つた人だ。

こういうことを喜ぶ。形式張つてはいないけれど、万事を几帳面にと心掛けるのは礼儀の精神だと言つてゐる。待つ間少時にして、背広服の河内山伯とモーニング姿の紳士が二人、続いて羽織袴の宇井閣下が奥さんに送られて現れた。青年達は一斉にお辞儀をした。その中に六尺豊かな兜山は風体骨柄とも異様な存在だったから、当然注目を惹いた。

「ほう」

と河内山伯爵は会釈をしながら微笑を洩らした。

「御前」

と兜山の金子君は遠慮を忘れて呼びかけた。

「何だね？」

「家の閣下もお芽出度いんでございますか？」

「さあ」

「万歳をやっても宜うございますか？」

「ハッハ、ハ、ハ」

「御前、如何でございますか？」

「やつても宜からう」

「諸君、もう安心だ。閣下の万歳を祝おう。宇井閣下方歳！」

玄関子達は閣下に叱られるかと思つて、聊か躊躇した
が、詰めかけていた新聞社の連中が大声で和した。

「万歳！」

「宇井内務大臣閣下万歳！」

「万歳！」

景気が好い。これで宇井閣下入閣受諾ということが分つた。写真班がレンズを向けた。閣下は玄関に立ったが、元来柄の小さい人だ。大男の河内山伯と並ぶと、甚だ貧弱に見えた。金子君が忌々しがつて、後から閣下を抱き上げた。同時に皆が手を挙げて喝采した。そこを数個のカメラが一斉射撃で取ってしまった。

「関取、あなたのお名前は？」

と新聞記者の一人が金子君を捉まえて訊いた。

「兜山です」

「頭へ被る兜ですな」

「そうです」

「有難う」

とお礼を言う一方、大きな声で仲間伝へた。

「おい、相撲の名前は兜山だ。頭へ被る兜の山」

パノラマと活動写真

集会室へ戻った四人の青年は意気軒昂たるものがあつた。大將が閣僚になるということは家の子郎党に取つて、この上ない大きな刺戟だ。就中、金子君が調子づいていた。

「おれ達の方じゃこういうのを摩利支天様がつくと云う。全勝は摩利支天様の御利益だ。似たり寄つたりの連中だもの、自力ばかりで勝ち放しつてことは到底むずかしい。大將が大臣になるのも矢つ張り同じ理窟だらうと思う。確かに摩利支天様が乗り移つていゝと見たから、おれはあやかる積りで抱き上げたんだ」

「お互にあやかりたいものだよ。忘れていたが、子供の時、出世俱樂部でものを持てたことがあつたね」

と小西君は憧れの眼を輝かした。

「これは皆出世俱樂部の続きだよ。僕はいつも並見村長のお蔭だと思つてゐる」

「うむ。村長さんの激励で皆発憤したんだ」

「あの頃は夢を見ていた。東京へ出て来れば、直ぐに横綱になれると思つていたが、何んのことやれ」

「怪童の為ちゃんだったな。強かつたよ。僕は高等生に苛

められた時、君に助けて貰った」

「村じゃ一番強かったが、東京へ来て見て驚いた。東京には村で一番強かったやつが日本国中から寄り集まってる」

「それはそうだろう。本当なら僕達はどう疾うに相撲を只で見せて貰って、西洋料理を御馳走になっている頃だぜ」
「空々寂々で自分ながら次第が分らない。おれはこれでも時々夜半に目を覚まして泣いているんだ」

「何うして？」

「今更面目ないと思つて」

「何あに、これからだ」

「出世倶楽部の昔に返らなければ駄目だ。いつの間にか奮発が足りなくなっている」

「お互にそうかも知れない」

「土曜日の晩に村長さんのところへ行つてお話を聞くと、帰りにもう天下無敵って心持になったものだ。本当のことを言うと、この大將よりも華見さんの方が子供を煽てる名人だよ。閣下は叱るばかりだ。おれはいじけてしまつた」

「閣下は謹厳そのものだからな」

「君は何だつたけな？ 文部大臣か？ いや、大学の先生だつたね。今でもその積りかい？」

「閣下にあやかりたいと思つている」

「君は有望だよ。子供の中から一番を続いているんだから、矢張り幾分摩利支天様が乗り移っているんだらう」
「学校の成績と世の中は違ふ。内務大臣にしろ、文部大臣にしろ、閣僚になることは大変な百分比だ。民間会社

の社長と違つて、椅子の数が限定されているんだから」

「内務大臣は大関かな？ 総理大臣が横綱なら」

「先ずその辺だろう」

「野郎共」

「何だい？」

「お前達が大学を出ない内に、おれは幕へ入つて見せるぞ」
「為ちゃん、そう言えば、僕達は高等学校を卒業しない中に、支那料理を御馳走して貰う約束だったじゃないか？」
と立川君が逆襲した。

「その代り今度は西洋料理と支那料理を両方一遍に御馳走してやるよ」

「君はもう恰好がついているけれど、僕なんか海のものの山のものか未だ分らない」

「君は何だつたけな？」

「農村改善さ」

「うむ／＼。二宮尊徳先生か？」

「出世倶楽部時代は簡単に考えていたが、これはナカ／＼容易じゃない」

「何あに、大地主の独り息子だ。金をばら撒けば、村のものは皆言うことを聞く」

「唯ばら撒いても仕方がないよ」

「野郎共」

「取的先生、鼻息が荒いや」

「お前達が百円の月給を取らない中に、おれは大関になつて見えるぞ」

「それまでにならなければ、一生なれないぜ。相撲は若い間だから」

「実はおれもそう思つて、ヤキモキしているんだ。出世俱樂部の昔に返つて奮発し直す。自動車王、何うだい？」

「君達は呆れたものだ。悉皆忘れているんだから」と三好君が空囁いた。

「何を？」

「東京で顔が合つてから間もなく、出世俱樂部は余り子供らしいからと言つて解散して、新に王将連盟つてものを拵えたじゃないか？」

「成程。そんなことがあつたようだ」

「そう／＼。初めに王将俱樂部として閣下に相談したら、将棋の俱樂部のようだつて笑われたものだから、王将連盟としたんだ」

と小西君が思い出した。

「王は自動車王の三好君の爲めさ。将はオリンピックの選手から陸軍将校志願へ転向した森君の爲めさ。よつて来るところをチャンと覚えてゐる」

と立川君も記憶の好いことを主張した。

「待てよ」

と考え込んで、金子君はこつこつ自分の頭を叩いて見せた。冗談だ。覚えがないのではないが、事志と違つてゐる爲めの自嘲だつた。味をやる。

閣下の入閣を契機に、一同は出世俱樂部と王将連盟の精神に戻らなければならないということになつた。金子君の横綱は動かない。小西君は宇井閣下の衣鉢を継いで閣僚を志す。三好君は建築技師への転向を声明して、自動車王は子供の頃の夢と言つた。立川君も二宮尊徳を取消して、農村改善と地味なところを行く。もう皆大人になつて、現

実の世界に目覚めたのだつた。

「ところで森君は何うしたんだろう？ この騒ぎに駆けつけない」

と小西君が三好君を見返つて訊くように言つた。

「来ると言つていたよ。先週」

「昼からだろう。青年将校、三越の散髪屋へ行つて、めかして来るんだ」

とこれは、立川君だつた。

「奴さんだけは早く物になつたよ。もう少尉だから豪いものだ。大学生連中、顔色なしだろう」

と金子君は森君と特別親しいから肩を入れる。

「少尉が何だい？」

「将校だよ、もう。君達に較べて出世が早いと言うのさ」

「早いことはない。大学を出れば中尉だ。医学士が軍医になれば、突き出しから軍医中尉だぜ」

と立川君、少し不平のようだつた。

「ところで、諸君、どうだろう？ もう内閣受諾と定つたんだから、一つ奥へお祝いを申上げる必要があると思うんだが」

と小西君が発議した。小西君は秀才中の秀才だ。出世俱樂部時代には腕力が脳力に伴ななかつたから森君あたりに苛められたけれど、昨今は体がガッチリして押しも押されもしない。自ら重きをして、一番の兄貴株になつてゐる。

宇井閣下のところは家庭も賑やかだ。長男次男は疾うに世帯を持ち、長女次女も既に片付いたが、末の令嬢と令息とその従姉妹がいる。宇井さんは氣むずかしい方だが、奥